

日本軍が中国に建設した忠霊塔（二）

横山 篤夫

1. はじめに
2. 張家口と日本人
3. 張家口の蒙疆神社と忠霊塔
4. 蒙疆忠霊塔と革命烈士紀念塔
5. 蒙疆忠霊塔の建設とその終焉
6. 統・北京の忠霊塔
7. 統・上海の忠霊塔
8. むすび

キーワード：大日本忠霊顕彰会・張家口・蒙疆忠霊塔・北京忠霊塔・上海大場鎮忠霊塔

1. はじめに

1937年7月の盧溝橋事件によって始まった日中全面戦争は、長期化して収束の目途は容易に立たなかった。

当初日本軍や政府の中には強力な兵力で中国軍に一撃を与えれば、中国は日本に和を乞い日中の諸課題は一気に日本に有利に解決できるという認識が多数を占めていた⁽¹⁾。しかし、当時南京にあった国民政府は、抗日民族統一戦線と呼びかけていた中国共産党と提携して徹底抗戦に舵を切り、1937年9月22日には第二次国共合作が成立した。日中両軍の戦闘は激化し、満州事変に比べると将兵の戦没者は激増した。

日本政府は戦時体制を整備して長期戦に備えようとした。そのため国民精神総動員運動を展開し、出征兵士の歓送、戦没者慰霊祭への参加、神社参拝、家ごとの国旗掲揚などを国民に求めた。

当時戦没者は、陸・海軍省が管轄する靖国神社にその魂が神として合祀された。靖国神社の祭礼には多くの人が参集したが、例大祭などの祭典に正式に参列できたのは軍や国家の代表者だけで、遺族ですら参列できなかった。戦没者を祭神として合祀する時でさえ、遺族は靖国神社までの交通費は支給されても合祀祭への参列は許されなかった。遺族は招魂祭庭から霊璽簿（戦没者氏名を祭神とするため書き出した名簿）が御羽車（御霊代の奉還に使用される輿）に乗せられて本殿に向かうのを闇の中で拝んで見送ることと、祭典終了後に昇殿して参拝するのを認められただけであった⁽²⁾。

特別の日に「英霊」とされる「ハレの場」である靖国神社へは、当時の交通事情からも簡単に出かけことはできなかった。遠い特別な場所ではなく、もっと身近に戦没者を追悼したいという声が広がった⁽³⁾。大阪では1938年4月25日大阪府知事池田清の次の呼びかけで関係者が集まった⁽⁴⁾。

支那事変が始まって一年、大阪出身者の

(1) 藤原彰『日中全面戦争』、『昭和の歴史』第5巻、小学館、1988年、80～81頁。

(2) 赤澤史朗『靖国神社』岩波書店、2005年、19～20頁。

(3) 例えば『中外日報』の1938年の紙面にはそうした各地の動向が頻繁に報じられている。

(4) 五十年史編集委員会編『大阪護国神社五十年史』

戦没者が相次いで聞かれるようになり、英霊の祭祀、顕彰に対する府民の関心も非常に高まる（中略）この際、全大阪五百万府民の崇敬対象にふさわしい大阪招魂社を是非とも創建したい。

こうした動きは各地に広がり、招魂社を管轄していた内務省は道府県に原則一社とする護国神社の設置を1939年4月に認め、各地に護国神社が創建された。

一方戦没者の遺骨は、陸・海軍墓地（全国に約90の陸・海軍が管轄する墓地）に埋葬されるのが原則とされた。日中戦争の戦没者の激増に対応して、1938年5月5日「陸軍墓地規則」が40年ぶりに全文改定し制定された。その結果、戦没者の遺骨・遺髪は「分骨又ハ分髪」して軍が用意した円形塚か白檜材製の箱に納めて合葬することになり、これ以後個々の戦没者の墓標は陸・海軍墓地には建てられないことになった。

本骨は遺族に渡され、各遺族によって家墓や地域、寺院の墓地などに埋葬された。その場合先祖代々墓に合葬される場合もあったが、多くは墓標の頭部が方錐形、四角柱の陸・海軍墓地で用いられた軍人墓独特の形をした単独墓に埋葬された⁽⁵⁾。しかし、戦没者の遺族にとっては単なる不慮の死者ではなく、国家の命に従って戦場に出かけて死んだ者を個人的に追悼するだけではなく公的に顕彰される場に埋葬してほしいという思いがあったようで、地域で名誉墓域を作る動きも見られた⁽⁶⁾。

こうした遺族の思いを組織したのが、日中戦争開戦2年目の1939年7月7日に結成した財団法人大日本忠霊顕彰会（以下「顕彰会」と略記）であった。会長は予備役陸軍大将菱刈隆、名誉会長は平沼騏一郎首相であり、軍官財など各界

から代表的人物を網羅した準政府機関のような組織であった。会長の菱刈隆は、かつて満州で在住日本人を組織して大忠霊塔を建設した関東軍司令官でもあった。菱刈は戦没者の分骨を戦地と国内で納める忠霊塔建設運動を、日本国内でも実現しようと考えたものと思われる⁽⁷⁾。

しかし戦没者の分骨を収納する忠霊塔を各地に建設しようとする運動が陸軍や仏教界の支援で大々的に進められると、戦没慰霊施設の中核に靖国神社・護国神社を置こうとする内務省・神社界との対立を惹き起こした。そのため陸・海軍省、軍事保護院、内務省神社局、同警保局が協議し、その合意により1939年11月11日に内務省から地方長官宛に顕彰会の事業を定義し規制する通牒が出された⁽⁸⁾。この通牒によると顕彰会の主要事業は、海外の「皇軍主要会戦地ニ於ケル忠霊塔ノ建設ニ対スル助成並ニ之カ維持祭祀」であり、財政上余裕ができた場合は国内の忠霊塔建設を助成・指導してもよいとされた。その際陸軍墓地の所在地で忠霊塔を作る場合は軍当局と協議の上、陸軍墓地に忠霊塔を建てることとされた。

この結果国内各地に建設された忠霊塔については近年調査と研究が進んでいるが、その前提とされた海外の主要会戦地に建設された忠霊塔の研究は少なく、充実していく必要がある。この問題意識から、日中戦争の戦場となった中国での忠霊塔について入手できた資料を整理して纏めたのが本誌第54号（2010年12月）に発表した拙稿「日本軍が中国に建設した忠霊塔」（以下「前稿」と略記）であった。

前稿発表を機にご教示頂いたことや、その後の資料調査で新たに判明したこともあり、また前稿では張家口の忠霊塔については触れられな

ある。

(7) 拙稿『『満州』に建てられた忠霊塔』『東アジア研究』第48号、2007年3月、135頁。

(8) 『中外日報』1939年11月17日掲載「支那事変に関する碑表建設の件」。

大阪護国神社、1994年、70頁。

(5) 拙稿「軍隊と兵士」『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房、2006年、27～28頁。

(6) 同前、54頁に紹介した大阪府南河内郡金岡村大字長曾根（現在堺市北区長曾根町）の事例はその一例で

かったが2011年8月に張家口を訪れる機会に恵まれて、中国での忠霊塔の全体像をある程度纏めることが可能になった。前稿との重複を避けるために本稿では張家口の忠霊塔を中心に論述し、北京と上海の忠霊塔については新たに判明したことを主に記述するに止めた。そのため必要な場合は前稿を参照して頂きたい。そうした意味から本稿の表題は「日本軍が中国に建設した忠霊塔（二）」とした。

中国に作られた忠霊塔は顕彰会が建設したものである。しかし戦場となった地域で中国軍民との戦闘で戦没した日本軍将兵の納骨施設を作る場合、実質はその地の日本軍が中心になって作らなければ実現はしなかった。顕彰会が日本国内で集めた資金をもとに、現地に日本軍を中心とした受け皿を作ったと考えられる⁽⁹⁾ので、その実態から前稿も本稿も「日本軍が建設した」と表記した。

なお本稿が対象としたのは戦没した日本軍将兵の分骨を収納する施設としての忠霊塔であって、遺骨が入っていない戦争記念塔である「表忠塔」、「記念塔」などは必要な範囲で触れるに止めた。

2. 張家口と日本人

顕彰会は忠霊塔の意義を体現した塔にするためにその設計図を公募し、それを参考に各地の忠霊塔を建設することとして、1939年にその

要項を発表した⁽¹⁰⁾。その中の「忠霊塔建設図案 懸賞募集規程摘記」には、趣旨を次の様に述べている。

本忠霊塔建設の主旨は今次聖戦に護国の華と散りたる我が忠勇義烈の士の分骨を安置して（過去戦役、事変等の忠死者の分骨をもなるべく多く含ましむるものとす）その忠霊を顕彰しその偉勲を記念すると共に日本全国の感謝の意を表徴し以て皇国を中心とする永遠の鎮護たらしめんとするにあり。

そして第一種（主要会戦地に建設するもの）、第二種（内地大都市に建設するもの）、第三種（内地市町村に建設するもの）に分けて募集し、特に第一種は「建設地が大陸なることを考へ特に雄渾のものたるべし」と規定した。その結果「応募期間短少時日ナリシニモ拘ラズ、応募作品実ニ一千六百九十九点ノ多キニ達シ空前の盛況ヲ呈シタリ」と多数の応募があり、その中から審査を経て第一種17点、第二種16点、第三種16点を『忠霊塔図案集』に収録して1940年3月に公表した⁽¹¹⁾。

その最後の頁に「大日本忠霊顕彰会の運動」という記事があり、事業目的を掲げている。

第一 今次事変の主要作戦地における忠霊塔、表忠塔、記念塔の建設に対する助成並にこれが維持祭祀。

(9) 内閣情報局『写真週報』第123号、1940年7月10日、8頁には「『一日戦死』の結晶 武勲讃ふ忠霊塔」の見出しで次の記述がある。「大陸の山野に、又海に空に興亜聖業の貴い礎となった幾多忠霊の勲功を後の世までのこし讃へるために立派な忠霊塔を各地に建設しようといふ計画は早くから進められてゐたが、昨年七月七日の事変二周年にあたって大日本忠霊顕彰会が創立されるに及んで漸く本極りとなつた。以来計画は順調に進み、大都市用、一般市町村用及び戦地用の各忠霊塔設計図も出来上がり、一般からの拠金も既に一年で三百四十九万円余に上つた。殊に建設基金は、畏

くも各宮殿下各王侯家からの御下賜金を始めとし、全将兵及び官公吏俸給一日分と全国民の赤誠に拠るものであるが（中略）各地の忠霊塔建設を補助するためには（中略）浄財献納になほ一層の努力をしたいものである」。なお見出しの「一日戦死」とは戦死した将兵のために一か月分の収入から一日分を顕彰会に募金しようという顕彰会が始めた運動の名称である。

(10) 顕彰会『忠霊塔図案集』朝日新聞社、1940年、奥付上部。

(11) 同前。

忠霊塔建設都市

北京、上海、張家口

表忠記念塔碑

漢口、徐州始め大会戦地二十二箇所
第二 内地の市、町、村に一基づつの忠霊塔
建設の指導と助成各自治体が祭主とな
り護国の華と散りたる忠霊を永遠に顕
彰する。

こうして中国では、北京、上海と並んで張家口に忠霊塔が建設されることになった。前稿では北京と上海の忠霊塔を取り上げて検討した。張家口については今後の課題とした。

中国の代表的都市である北京と上海に比べると、張家口は人口も当時やっと10万人前後の小都市であり、多数の死傷者が出た激戦地でもなかった。顕彰会がなぜ張家口に忠霊塔を建てることにしたのかを解明するために、張家口と日本人のかかわりから考察する。

張家口市は北京市の西北に隣接している。現在は高速道路で直結しており、北京市の中心部から自動車でも1時間半程走ると、万里の長城で有名な八達嶺が右に見えてくる。そこから走ること約1時間半で張家口市の中心部に入る。現在河北省に属し、高原に立地する内陸型の工業都市である。

1974年に日本で刊行された地名事典⁽¹²⁾では次の様に記述している。

人口約20万、華北平原からネイモンクー（内蒙古）高原に通じる咽喉部にあたり、チンパオ（京包）鉄道に沿う。万里の長城（外長城線）は本市北部をほぼ東西に走り、古来長城内の農業地域と長城外の牧畜地域

との接触点として、農産物と畜産物の交易が盛んであった。

2007年に中国で発行された地図⁽¹³⁾の資料には張家口城区は人口89万人、面積845km²とある。2011年9月に見た張家口市の公式ホームページは人口459万人、面積は36,829km²とある。2011年に発行された地図⁽¹⁴⁾の資料にも同じデータが掲載されている。

2007年から2011年の4年間に、人口が5倍増であるのに対し、面積は55倍にもなっている。これについては安俊杰氏は中国政府の政策により、6カ年計画で内陸部の都市化の比率を高めるため、内陸部都市周辺の農村を合併し、工業化を進めているからであるという⁽¹⁵⁾。

張家口周辺には巨大な風力発電の風車が目につき、火力発電所もあり、高原の一角には高層住宅が建設中である。

現在の張家口市は旧張家口（張家口城区）に周辺地域が合併され、内陸の大工業都市をめざしている途上にあるといえる。以上のような事情から本稿では、以下1940年前後の旧張家口市を「張家口」と記し、現在の張家口市と区別して用いる。

張家口の歴史に詳しい安俊杰氏は、張家口の歴史的位置について次のように語った⁽¹⁶⁾。

張家口は元、明、清の時代から近現代に到るまで、政治的・軍事的に民族や国家関係が緊張すると、中国北西部の窓口として重要な拠点であり、注目され重視されてきた。近年でも、中国とソ連の関係が緊張した時期には、外国人の立ち入りは禁止され1997年まで続いた。平時には大境門に見

(12) 渡辺光他編『世界地名大事典』7巻、朝倉書店、1974年、732頁。

(13) 星球地図出版社『河北省地図冊』2007年、31頁。

(14) 人民交通出版社『河北省及京津地区公路里程地図冊』2011年、13頁。

(15) 2011年8月19日、筆者が張家口泥河湾歴史文化研究会会長安俊杰氏より聞きとったメモによる。安氏は張家口市の元幹部であり、現状についても詳しく話を聞くことができた。

(16) 同前、聞きとりのメモから筆者が文章化した。

表1 張家口居留日本人、朝鮮人、台湾人人口（単位：人）

年	日本人（内男性）	朝鮮人（内男性）	台湾人	備 考
1922	26 (18)			張家口に日本領事館開設
1926	30 (19)	68 (37)		
1930	15 (10)	10 (4)		
1934	43 (33)	12 (4)		
1935	303 (233)	12		関東軍が華北分離工作開始 内蒙工作により日本人急増
1936	736 (520)	42 (13)	1	
1937	619 (443)			日中全面戦争開戦、関東軍 8月に張家口占領
1938	4,773 (2,864)			
1939	13,829 (8,405)	1298 (755)	8	9月に蒙古聯合自治政府成立 を宣言、張家口は首都になる
1940	*19,254 (11,789)	984 (537)	8	
1941	21,408 (12,987)	978 (538)	8	
1942	19,556 (11,847)	966 (534)	18	
1943	21,089 (12,771)	1,481 (798)	24	
1944	21,773 (11,777)	1,289 (713)	42	

出典：小林元裕「蒙疆の日本人居留民」表7-1から一部引用。備考を筆者が加えた。

※は原表では「11,254」であったが、内訳が男性11,789、女性7,465となっているので誤植と考え男女を合計した人数に訂正した。

られるように、塞外と中国の文物、物資が交流した平和的な町であった。

この指摘は日中戦争時代の張家口の位置にもあてはまる。1922年に日本の領事館が張家口に開設されてからの、日本人と当時は日本の植民地支配下にあった朝鮮人、台湾人の居留人口を示したのが表1である。張家口の人口が約10万人といわれた時期に、日本人の居留人口は1935年から3桁になり、1938年には4桁に、1939年からは5桁に跳ね上がった。この間の歴史を辿りながら、忠霊塔が張家口に建設されることになった日本人社会の状況を見てゆく。

1931年に関東軍が満州事変を起こし、翌年には満州国の建国を宣言したが抗日武装闘争は容易に終息しなかった。武力鎮圧に当たった関東軍は満州国内の抗日勢力の背後には中国共産

党があり、その浸透を防ぐためには満州国と境を接する華北5省（河北、山東、山西、チャハル、綏遠の中国北部の5省）を中国から切り離し、華北を日本の実質的支配下におくことが必要だとして華北分離工作を強行した⁽¹⁷⁾。

1935年6月の梅津・何応欽協定により河北省から国民党の組織を撤退させ、北京（当時「北平」であるがその後の推移も含めて述べるため本稿では「北京」と表記する）、天津を実質的に非武装化させた。さらに同月の土肥原・秦徳純協定によりチャハル省内にも非武装地帯が設けられた⁽¹⁸⁾。

この状況下で関東軍は特務機関を拡充し、モンゴルの中国からの独立を目指していた徳王への接近工作を本格化した。張家口に設置された特務機関は、関東軍の対中国現地交渉の最前線となった⁽¹⁹⁾。一方南京の国民政府に不満を持

(17) 藤原彰『日中全面戦争』前掲、58頁。

(18) 同前、59頁。

(19) 森久男『日本陸軍と内蒙工作』講談社、2009年、143～144頁。

つ親日政治家・軍人を関東軍が後押しして、国民政府が軍事介入できぬ地域に冀東防共自治政府を組織した。同政府は国民政府の関税が及ばない貿易を奨励し、日本からの輸入品を大量に受け入れた。この輸入品の検査料収入により同政府は莫大な利益をあげ、その一部は関東軍のモンゴル（内蒙）独立工作などの経費に使われた。同時にこの日本製品の流入は中国の民族産業に大きな打撃を与え、中国人の抗日意識をさらに強める契機となった⁽²⁰⁾。こうした状況下で張家口で日本人の姿を見るのが珍しいことではなくなっていた。

張家口の居留日本人人口が619人から4,773人に急増した1937年から翌年にかけては、盧溝橋事件を契機に日中全面戦争を拡大した時期であった。日中全面戦争を始めた当時の日本軍は支那駐屯軍（司令官陸軍中将香月清司）であったが、その支援として関東軍はチャハル省に侵攻する必要があると強く主張して参謀本部の了承を得た。関東軍のチャハル作戦のために編成されたチャハル派遣兵团（のちに蒙疆兵团）を先頭に立って指揮したのは、関東軍参謀長であった陸軍少将東条英機であった。チャハル派遣兵团の機械化旅団の激しい攻撃に中国軍は退却し、チャハル派遣兵团は1937年8月27日にチャハル省の省都であった張家口を占領した。参謀本部の命令はそこまでだったが、チャハル派遣兵团はさらに西進して大同、集寧、綏遠を占領し、10月17日には包頭までも占領した。この一連の作戦は「関東軍の稲妻作戦」と呼ばれ、陸軍中央からも追認され評価された⁽²¹⁾。

これを一つの契機に東条英機は陸軍次官に迎えられた⁽²²⁾。関東軍占領地には蒙疆三自治政府と蒙疆聯合委員会が組織され、新しい占領地の一体的支配が目指された⁽²³⁾。

1937年11月22日に張家口で蒙疆聯合委員会が結成されると、張家口には日本の軍人、官僚、関連企業人が居住するようになった⁽²⁴⁾。そこに商機を見た日本人も多数やってきた⁽²⁵⁾。同年12月には蒙疆兵团司令部が張家口に開設された。陸軍中央は関東軍を対ソ戦に専念させるため、1938年7月には蒙疆兵团を中央直属の駐蒙軍に編成替えした⁽²⁶⁾。

1938年12月、中国における日本軍占領地行政を担当する中央官庁として興亜院が設置された。翌年3月には張家口に興亜院蒙疆連絡部が設置されて特務機関は廃止された。同連絡部長は陸軍少将級が担当した。

そして張家口の日本人居留人口が1万人を超えた年である1939年9月1日には、三自治政府と蒙疆聯合委員会という「分治分作の煩瑣なる行政形態より離脱してこれを簡素たる単一政権に統合⁽²⁷⁾」したとする蒙古聯合自治政府が張家口を首都として成立を宣言した。内モンゴルの独立を目指す徳王が主席になり、チンギスハーン紀元を用いるなど、モンゴル民族独立の希望を吸収して成立した政府という体裁をとった。

蒙古聯合自治政府の実権は、政府の最高顧問金井章次に代表される日本人、日本軍が握った⁽²⁸⁾。管内に住む民族の構成は、表2の通りであり中国の一画に日本軍がモンゴル人を表に立

(20) 藤原彰『日中全面戦争』前掲、59～61頁。

(21) 保阪正康『東条英機と天皇の時代』筑摩書房、2005年、169～170頁。

(22) 同前、186頁。

(23) 森山康平『図説日中戦争』河出書房新社、2000年、51頁では一体的支配に関東軍が執着したのは共産勢力の阻止と同時に、鉱石やアヘンが入手できることがあったことを指摘している。

(24) 中嶋万蔵『徳王とともに』私家版、2000年、55頁。

(25) 小林元裕『蒙疆の日本人居留民』『日本の蒙疆占領』研文出版、2007年所収、207頁。

(26) 防衛庁防衛研究所戦史室編『北京の治安戦（1）』朝雲新聞社、51頁。

(27) 蒙疆新聞社『蒙疆新聞』388号、1939年9月2日。

(28) 柴田善雅『日本の蒙疆支配体制』前掲『日本の蒙疆占領』所収、56頁。

表2 蒙疆の1943年の民族別人口（単位：人）

民族	人口	%
漢人	5,279,299	95.5
モンゴル人	158,700	2.9
日本人	37,819	0.7
回人（ウィグル人）	37,572	0.7
満州人	11,021	0.2
朝鮮人	2,596	
その他の外国人	379	
無国籍	262	
台湾人	23	
合計	5,527,671	100

出典：『蒙疆年鑑』（1943年12月30日発行）の105頁から作成。

てて作った傀儡政権という評価は覆らないであろう。事実1945年8月15日、日本の降伏と共に蒙古聯合自治政府は消滅した。

しかし徳王をはじめとした、モンゴルの近代化と独立を願う運動があったことは事実であり⁽²⁹⁾、その思いに共感して人生を賭した日本人たちがいたことも事実であった。

なお張家口居住の日本人と内モンゴル各地から張家口に集まった日本人が張家口、内モンゴルから1945年8月に脱出するについては、次の事情により悲劇は最小限におさえられて引き揚げられた。即ち蒙疆自治政府の消滅後も関係者が駐蒙軍と協議し、数千人の駐蒙軍が南下してきた数万人のソ連軍、外モンゴル軍と張家口の近郊で対峙・交戦して張家口駅から数万人の日本人が脱出するのを支えた⁽³⁰⁾。張家口は日本人脱出後間もなく、包囲していた轟米臻司令の八路軍が市内を確保した⁽³¹⁾。

3. 張家口の蒙疆神社と忠霊塔

張家口の日本人社会は突然出現し、わずか数

(29) 森久男訳『徳王自伝』岩波書店、1994年の訳者解説「二、徳王は日本の『傀儡』であったのか」（498～502頁）参照。

(30) 稲垣武『昭和20年8月20日 内蒙古・邦人四万人奇跡の脱出』PHP研究所、1981年に詳しい。

年でその姿を消す。その間日本の統治のためであったが学校や医療施設などが日本人によって作られた。その多くの施設は戦後も使用された⁽³²⁾。

しかしそれと同時に、日本の統治を象徴する施設も作られた。蒙疆神社と忠霊塔である。これらがどのように作られ、どのような規模であったかについては『蒙疆年鑑』⁽³³⁾に具体的な記述があるので引用する。

蒙疆神社 昭和十五年四月御造営奉賛会が結成され、工事予算三十万円をもって社殿を御造営奉齋することに決し、同年八月起工、翌十六年九月に本殿その他附属建物の落成を見、十月六日鎮座祭を厳修（中略）緑化計画も同時に進行、蒙疆の総鎮守に相応しい景観を添へるに至った。

蒙疆神社は張家口の東、当時の地名で東太平山二台子（現在の東山の山麓）、張家口から見上げる小高い位置に建てられた。祭神は天照大神、明治天皇、国魂大神、永久王命とされた。忠霊塔については『蒙疆年鑑』に次の記述がある。

忠霊顕彰会が中心となって大東亜建設発足四周年を記念して総工費予算五十五万円を着工してから一年三箇月目の昭和十七年十月十六日に、蒙疆忠霊塔は張家口東太平山麓に竣工した。この日厳かな竣工式が挙行され、西北鎮護の神を永遠に顕彰することになった。主材は現地産の大理石や花崗岩、高さ四十五メートル、表面積は五百二十八メートル（平方メートルか）である。

高層建築のなかった1942年10月時点の張家口では、45mの巨大な塔は全市から仰ぎ見られる存在であったと思われる。1943年1月に

(31) 同前、224頁。

(32) 西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年、408～409頁。

(33) 蒙疆新聞社編、発行『蒙疆年鑑』1943年12月30日発行、368～369頁。

2 國府參戰、敵愾同仇殲滅美英、現
地側の鬪魂火と熾る（一月十四日、
蒙疆神社前廣場にて）

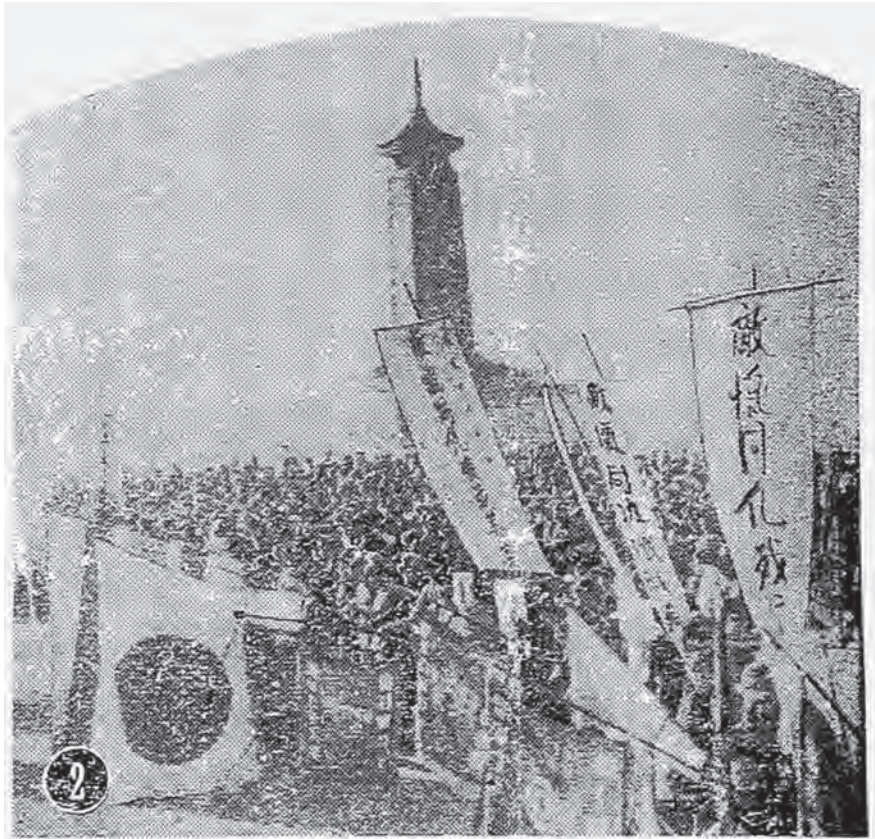


図1 蒙疆神社の本殿側から集会を写した写真の背景に巨大な忠霊塔が写っている。

（『蒙疆年鑑』1943年12月発行 口絵とそのキャプション）

撮影された蒙疆神社前広場で戦勝を祈念した集会の写真が、『蒙疆年鑑』の口絵に掲載されている。この集会の背景に巨大な忠霊塔が写っている（図1）。このことから蒙疆神社に隣合わせて忠霊塔が建っていたことが分かる。

張家口に居留したこのある日本人の集まりである「日本張家口の会」（会長北川昌氏）は、現在も張家口友好旅行の実施や機関誌発行などの事業を続けている。同機関誌『塞外文化』⁽³⁴⁾には2010年9月に張家口を訪ねた時の記録・感想が掲載されている。その中にかつて自分達が見た蒙疆神社と忠霊塔が形を変えて、現在も張家口の前あった位置に存在しているとの旅

行記があった⁽³⁵⁾。それを手がかりにして筆者も2011年8月19日張家口を訪ねその状況を確認することができた。その時のメモと入手した資料から、現在の張家口勝利公園（烈士陵園の表記もある）の配置図を作成した（図2）。

顕彰会は建設都市名は挙げているが忠霊塔名は明示していない⁽³⁶⁾。張家口では蒙古聯合自治政府を樹立する契機となったチャハル作戦の占領地全域の戦没者分骨を収納するという意味で「蒙疆忠霊塔」と名付けたのであろう。『蒙疆年鑑』では蒙疆忠霊塔前での祭典を次のように記述している⁽³⁷⁾。

(34) 日本張家口の会『塞外文化』第74号、2011年1月。

(35) 鶴留エマ「張家口恋日」『塞外文化』第74号所収、10頁。

(36) 前掲『忠霊塔図案集』所収の「大日本忠霊顕彰会の運動」。

(37) 前掲『蒙疆年鑑』369頁。

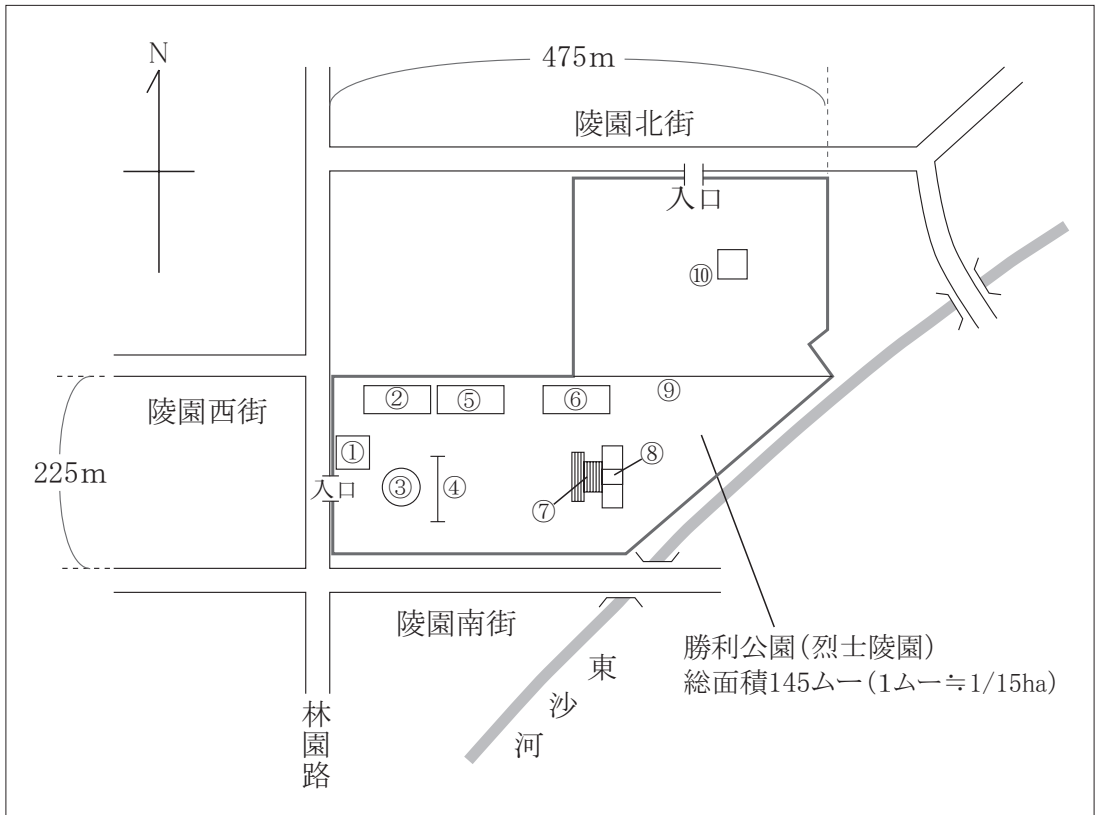


図2 勝利公園(旧蒙疆神社、旧忠霊塔所在地)配置図

①守衛室 ②察哈爾烈士陵園管理所 ③円形池と大噴水 ④顕彰のためのアーチ形の門(牌坊) ⑤察哈爾革命紀念館 ⑥革命烈士紀念堂 ⑦階段 ⑧革命烈士紀念塔(旧蒙疆忠霊塔を改造したと筆者が考える塔の基壇建物) ⑨現在は壁で仕切られて通り抜けできない(以前は一体だった) ⑩子どもの遊具などを収納している建物(旧蒙疆神社本殿)

(2011年8月19日筆者が訪問した時のメモと察哈爾烈士陵園管理所提供の資料により作図)

忠霊塔臨時大祭 護国の霊安かれと、赤誠をこめた初の忠霊塔臨時大祭は、昭和十七年十月二十日厳粛盛大に執り行はれた。この日境内では武道、相撲、演芸などの各種催しを新祭神に捧げて、不滅の遺勲を偲び奉った。

忠霊塔初例祭 蒙疆忠霊塔の初の例祭は昭和十八年四月三十日塔前広場で執り行はれた。この日全邦民は各在所で敬虔な感謝の祈念を捧げた。

蒙疆忠霊塔に関する記述で一貫していることは、戦没者分骨が「西北鎮護の神」、「新祭神」、

「護国の霊」と神霊として扱われていることである。本稿のはじめに述べた通り戦没者の遺骨を納める墳墓としての忠霊塔が、蒙疆忠霊塔では慰霊の祀殿とも重ねたものとして扱われていたことが分かる。日本国内では護国神社の境内に建てられた忠霊塔は存在しない。しかし蒙疆神社境内に忠霊塔が建設されたのは、東太平洋麓を「慰霊の空間」とする都市計画があり、日本が統合する象徴としたのではないと思われる。ただし神道は死者の遺骨は穢れたものとしているが、それをどう考えたかの問題が残る。この点に関して、蒙疆神社の祭神をめぐって神道界の代表とし海外神社の祭神、祭礼などにつ



図3 蒙疆忠霊塔鎮座祭

貼ってあったアルバムのメモに「張家口忠霊塔忠霊鎮座祭 祭典(夕暮)に参集の軍官民」とあるので、1942年10月16日午後の状景である。円形池、噴水の後方、やや小高い場所に忠霊塔が聳えている。写真左手奥に蒙疆神社本殿の建物があるがやや離れているので写っていない。(北川昌氏 提供)

いて指導するために派遣された外務省嘱託の小笠原省三が駐蒙軍参謀長の田中新一大佐と論争した話を伝えている。⁽³⁸⁾ それによると神道の立場からの小笠原の主張を田中は遮り、軍刀に手をかけて四祭神は「日本の国策」と断じて蒙疆神社の祭神を決定したという。

駐蒙軍の意向が祭神の決定にまで及んでいたことを示す事例である。蒙疆忠霊塔の設置位置についても同様のことがあったのではなかろうか。

4. 蒙疆忠霊塔と革命烈士紀念塔

蒙疆神社の本殿は、写真(図4 A)から切妻屋根、桁行5間梁行3間であったことが確認さ

れる。その本殿があったと比定される場所に陸屋根、桁行5間梁行3間の建物があり、2011年8月現在子どもの遊具などの物置に使用されている(図4 B)。撮影の角度が違うが見比べて同一建物であることは容易に認められるであろう。つまり蒙疆神社本殿は、改造されて現在も使用されているのである。

忠霊塔があったと考えられる場所には、現在革命烈士紀念塔(以下「紀念塔」と略記)が建っている。ほぼ同じサイズに写真を並べたのが図5である。忠霊塔(A)の塔高は45m、紀念塔(B)の塔高は28m⁽³⁹⁾であった。Aは遠景の、Bは近くから仰角の撮影なので厳密ではないが塔高のサイズを基準に比定したのが図5の下に記した数字である。塔高は異なるが基

(38) 小笠原省三編述『海外神社史上』1953年、を復刻した『海外神社史』ゆまに書房、2004年、235～236頁。

(39) 察哈爾烈士陵園管理所編、発行『察哈爾烈士陵園簡介』2011年、3頁。

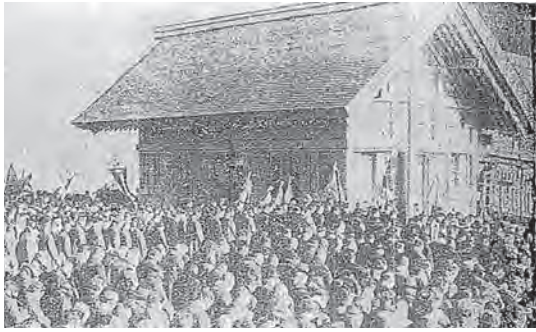


図4-A 蒙疆神社本殿

切妻屋根、桁行5間梁行3間、蒙疆新聞社編・発行『蒙疆年鑑』1943年12月刊の口絵「大東亜戦争一周年、蒙疆神社大前に赤誠の完勝祈願」（1942年12月8日）の一部を縮小コピーした。



図4-B 現在、子どもの遊具などの物置

蒙疆神社の切妻屋根を撤去して陸屋根とし物置などに利用しているが、本殿の構造の柱、桁、梁、壁はそのまま使用されている。入口の狛犬は残っている。（2011年現在）

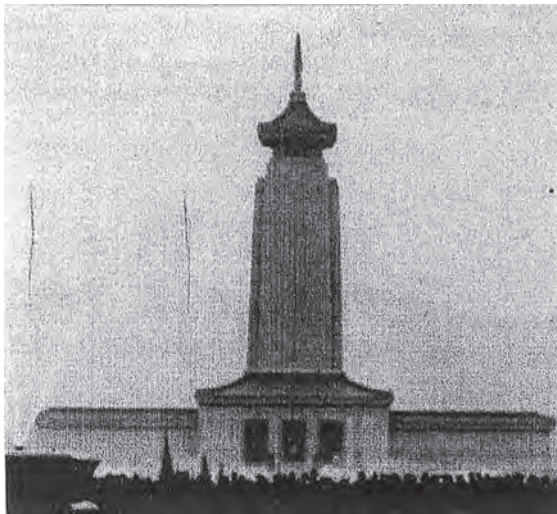


図5-A 蒙疆忠霊塔（1942年撮影）

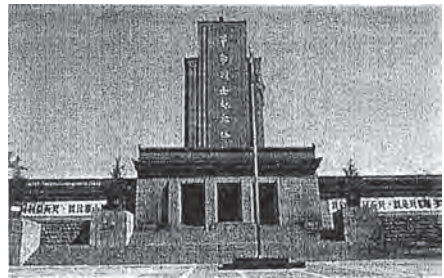


図5-B 革命烈士紀念塔（2011年撮影）

図5 蒙疆忠霊塔（A）と革命烈士紀念塔（B）

塔高がAは45m、Bは28mであることから、これをもとにA、Bのサイズを比定した。塔の下の共に入口が3箇ある基壇の建物の横幅は共に約19m、塔が基壇の建物と接する部分の横幅も共に約9mである。基壇の建物の高さも共に約6mであり、屋根の部分は改修されているが基壇の建物は同一であると判断する。一部削ったのか、壊して立て替えたのかは分からない。（Aは北川昌氏提供写真の一部）

本的な部分はほぼ共通している。筆者は写真の比較から基壇部分の屋根は改造されているが基本的には同一建物であり、忠霊塔の上半部を17m削ったか塔を取り壊して新たな塔を建てたものと判断した。

2011年8月19日に筆者が察哈爾^{チャハル}革命烈士陵園管

理所で聞き取ったメモと、当日入手した『察哈爾^{チャハル}革命烈士陵園簡介』（パンフレット）で判明した記念塔に関するデータの概要を、以下に箇条書き⁽⁴⁰⁾にした。

- ① 1948年12月に張家口は国民党の支配から解放された。華北人民政府は新たに察

(40) 筆者が和訳し、横山いづみ氏に補訳してもらった。

哈爾省を作り、革命のために犠牲になった 17,000 人以上の省内全烈士を記念するため張家口に陵園を作ることを決めた。

- ② 陵園は 1949 年 2 月から 1951 年 4 月までの工事で竣工した。察哈爾省主席が主祭者となり 3 万人以上が参加した盛大な落成式と公祭（告別式）があった。
- ③ 塔高は 28 m あり塔内には烈士の紀念堂が設けられている。塔の下の両脇の建物には、「人民の利益の為に死す、これは泰山よりも重い」、「我々は人民の為に死す、これぞ死に場所を得たり」と書かれている。
- ④ 館内には革命烈士の「英名録」があり、大革命期、抗日戦争期、解放戦争期、抗美援朝期の烈士の名が録されている。
- ⑤ 塔前には 5,000 m²の広場があり、広場の両側には縦横に千本以上の松柏が植樹され青々と茂り陵園らしい環境を形成している。
- ⑥ 陵園は何度も市の財政などから修繕費が支出され、ふさわしい景観を發展させてきた。1970 年には陵園管理所が張家口市の所属として設置された。
- ⑦ 陵園は開園以来国内外の代表たちが烈士の追悼にやってきた。1995 年には「愛国主義教育基地」（全国に百箇所）の一つに指定され、年間の来園者は百万人に達し、その内約 80% は青少年である。陵園は張家口の代表的見学地となっている。

陵園を案内し説明してくれた陵園管理所の職員は最近赴任してきて年齢も若く、1949 年以前の忠霊塔との関係は何も知らないとのことであった。

前述した安俊杰氏に忠霊塔と紀念塔の関係を尋ねると、概要以下のような見解を聞かされた。⁽⁴¹⁾

張家口の歴史を調べている人の中で、日本軍が作った忠霊塔を調べている人はいないと思う。私の理解では日本軍が作った蒙疆神社の一施設が忠霊塔だった。1945 年 8 月に日本軍が撤退した後、八路軍とソ連軍が張家口に入った。その直後に蒙疆神社は全部壊されたと思う。その跡地に紀念塔が建設され陵園が作られた。公園名が「勝利公園」というのは、抗日戦争だけでなく、国共内戦にも勝利して新しい時代を切り拓くことになったのを記念した命名だと思う。

安氏は 2011 年現在 68 歳なので、自らの体験を語ったのではなく市の元幹部として理解していたことを伝えてくれたものと考える。

筆者が、蒙疆神社跡を訪ねた時、公園の木陰でギターを弾き歌をうたっている老婦人がいた。その場で会話した内容のメモを筆者が文章化した一部を以下に引用する。

北京で生まれ、1967 年に張家口に音楽の教師として来て家を持った。その頃聞いた話では紀念塔は昔日本人が作ったものを 1945 年に作り変えたということだ。自分は既に退職して北京に家があり、張家口には避暑に来ている。最近張家口に来る日本人が多い。昔は日本人がたくさんいたからだ聞いた。中日間で戦争があったが悪いのは日本の当時の政府で、日本人には親しみを感している。

筆者が北京に滞在中に検索したインターネットの情報の中に、現在の勝利公園の写真と合わ

(41) 注 (16) に同じ。

せて書き込みがあった。その主な内容を日本語にした⁽⁴²⁾のが以下の文である。なお書き込んだ人の名前は分からない⁽⁴³⁾。

蒙疆神社跡に行った。もともと東山山腹は蒙疆駐屯軍司令部の所在地であり、同軍はもとは関東軍に属していた。張家口、大同、錫盟、烏蒙などからなる「蒙疆」は、当時の「満州国」と類似する位置にあった。日本と深い関係にある「蒙疆自治聯合」^(マフ)だったから、張家口には日本の建物があった。76歳の現地の老人の話では、蒙疆神社に安置されていたのは戦死した日本軍の兵士で、東京の靖国神社と同様のものであった。神社の前には大きな鳥居があったが随分以前に無くなった。その老人が言うには、現在の察哈爾陵園も、もともと蒙疆神社を構成していた一部で元は蒙疆神社の「忠霊塔」があった所であった。その中には戦死した日本軍将校の軍刀などがあったという。張家口の第一次解放の時に、台座上部の「忠霊塔」は爆破された。現在の記念塔は、日本人が建造したものを修造したものである。陵園の大きな池と噴水も、もとは蒙疆神社に属していた。(以下略)

公園での老婦人からの聞き取りと合わせて、中国にも日本軍の作った忠霊塔が改造されて記念塔になったという言い伝えがあることは確かめられた。

蒙疆忠霊塔に何人の日本軍将兵の分骨が納められていたかを明記した資料は見当たらない。ただ「蒙疆」というモンゴル人と漢人などが混住する地域を一括し、蒙疆聯合自治政府を作る

契機は関東軍のチャハル作戦であった。そしてこの作戦で戦死した日本軍将兵は412人であった⁽⁴⁴⁾。その後追葬があってもこの人数が忠霊塔に納められた分骨数のもとであったと考える。

この戦没者数に比べて、建築費55万円、大理石などで作った45mの高さの忠霊塔は余りにも巨大である。またチャハル作戦は大会戦もなかった。それなのになぜ巨大な忠霊塔を建設したのか。この問題については中国で作られた忠霊塔全体の問題の一つとして最後に検討する。

5. 蒙疆忠霊塔の建設とその終焉

蒙疆忠霊塔の着工については、「盛大に開工式を挙げる」の記事が残っている。日本軍の後押しで樹立された「華北臨時政府」が、住民を組織する狙いで「新民会」という組織を作った。その「中央指導新聞」として発行された『新民報』に以下の記事⁽⁴⁵⁾が掲載された。

〈張家口発〉民族の平和と新東亜建設のために、蒙疆建設の尊い犠牲となつた護国の英霊を永久に記念するために、蒙疆忠霊塔の開工式が12日午後2時に開催された。朝野の名士が参列して厳粛に挙行された。蒙古聯合自治政府行政総務科長の黒柳幹事が開会の辞を述べ、次いてお祓いをして神霊を招き、供物を供えて祝辞を述べた。その後金井祭主、^(マフ)部隊長、竹下興亜院長官、渡辺総領事、李満州国代表、丁内務部長、森岡民団長、在張家口各会社代表、寺崎蒙疆銀行総裁、在郷軍人会分会長、婦人会代表が順に玉串を奉奠した。その後供物を撒き神霊を送り、午後3時に黒柳幹事が

(42) 筆者が和訳し、坂井田夕起子氏、横山いづみ氏に補訳してもらった。

(43) 2009年2月9日に書き込んでいる。日本に帰って検索したが、この文は削除されていて見られなかった。

(44) 前掲『蒙疆年鑑』81頁。

(45) 『新民報』1941年7月14日、なお『新民報』については前稿115頁参照。この記事は筆者が和訳し、坂井田夕起子氏に補訳してもらった。

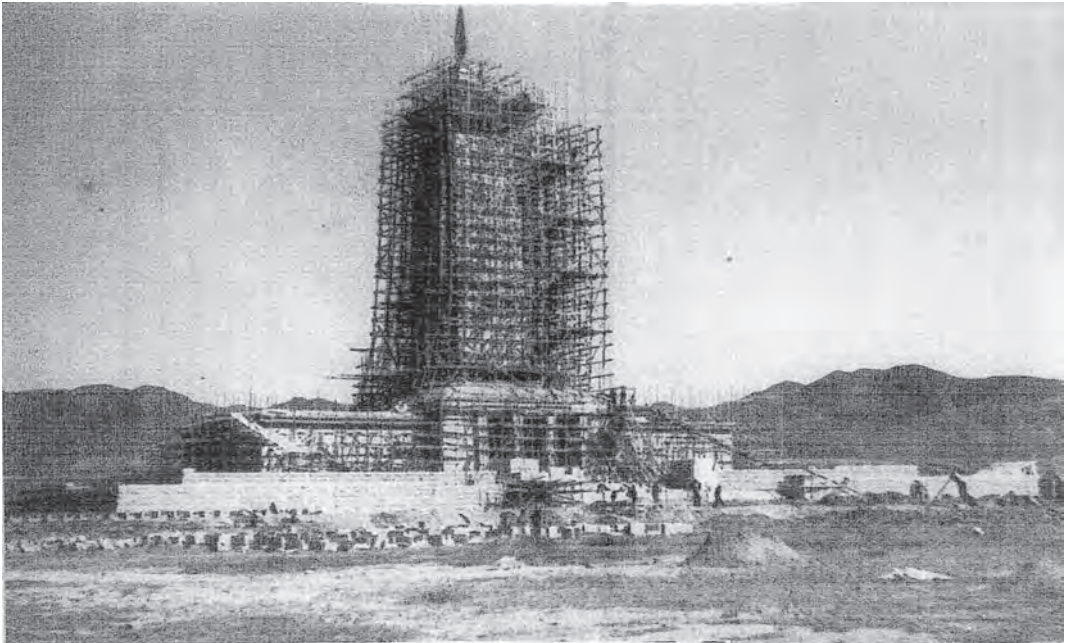


図6 建設中の蒙疆忠霊塔（北川昌氏提供）

閉会の辞を述べて式は終了した。なお本工事の費用は50余万円、清水組が建設を担当するということである。

見出しは2段、記事は1段の短い記録だが、色々なことが読みとれる。

式を挙行した「祭主」は、蒙古聯合自治政府最高顧問の金井章次であり、関東軍をバックに実質は同政府の最高実力者であった。また同政府の行政総務科長であった日本人官吏⁽⁴⁶⁾黒柳が幹事を担当している。このメンバーたちが『蒙疆年鑑』の記事にあった「忠霊顕彰会」の中心であったのであろう⁽⁴⁷⁾。祭主の次に玉串を奉奠した「^(ママ)〇〇部隊長」とは、日中全面戦争で動員する兵力を秘匿するため部隊名を伏せているが駐蒙軍司令官の甘粕重太郎陸軍中將である⁽⁴⁸⁾。次の「竹下興亜院長官」は、占領地行

政担当の興亜院蒙疆連絡部長官竹下義晴であった⁽⁴⁹⁾。こうした張家口に駐在した軍官界の代表者に蒙疆銀行総裁、在郷軍人会分会長らも網羅し蒙疆忠霊顕彰会が組織されたものと思われる。

また起工式は玉串を奉奠して進められ、神道式で挙行されている。特に注目されるのは戦没者の分骨を納める忠霊塔の式典に、遺族代表の参加が無かったことである。墳墓としての忠霊塔であるよりも「西北鎮護の神」⁽⁵⁰⁾として扱われたからであろう。

蒙疆神社創建にあたっては御造営奉賛会を作り募金を集めている⁽⁵¹⁾。しかし蒙疆忠霊塔に関しては着工、竣工の記事にも一切募金の話は出てこない。しかも工費は55万円と、蒙疆神社の1.8倍もかかっている。この資金は中央の顕彰会が「今次事変の主要作戦地における忠霊

(46) 前掲「日本の蒙疆政治支配体制」63頁に「日本人官吏は幹部職員に納まり事実上の実権を掌握」とある。

(47) 注(33)の蒙疆忠霊塔の項。

(48) 秦郁彦編『日本陸軍総合事典〔第2版〕』東京大学

出版会、1991年、368頁。

(49) 同前489頁。

(50) 前掲『蒙疆年鑑』369頁。

(51) 同前368頁。

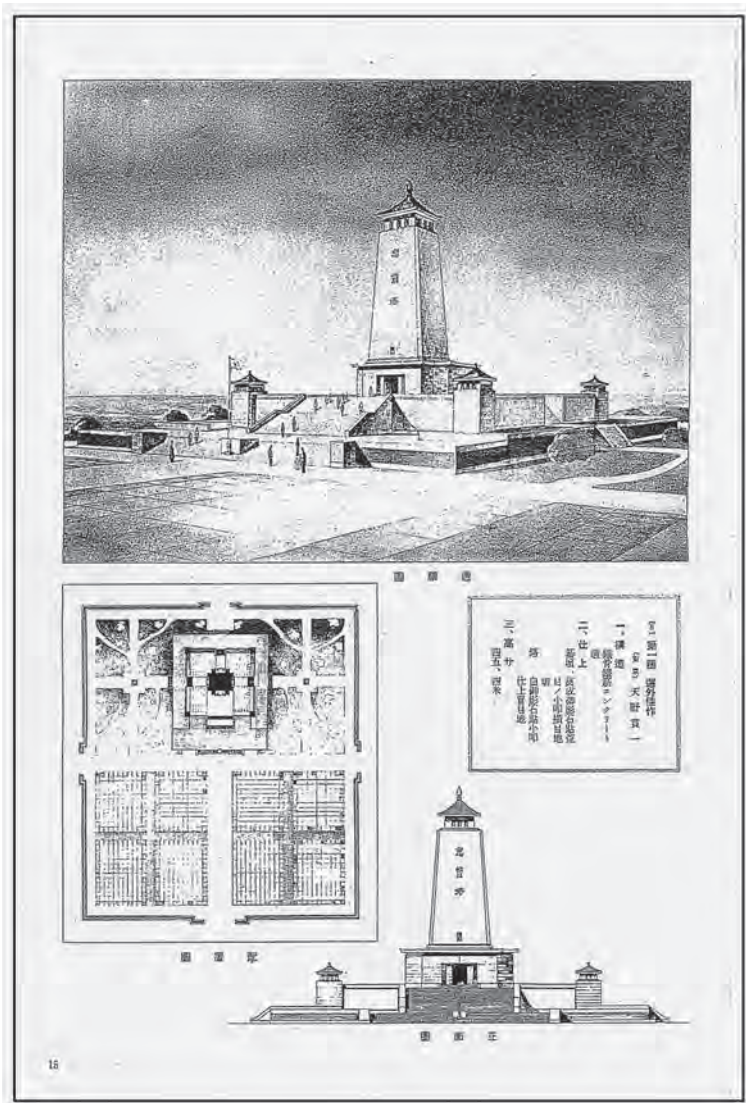


図7-A 顕彰会『忠霊塔図案集』所収 天野貫一設計図案



図7-B 完成した蒙疆忠霊塔
(北川昌氏提供)



図7-C 忠霊塔前での記念写真
(西原弘氏提供)

忠霊塔前の階段を昇る人物の大きさから基壇の建物の大きさの見当がつく。

図7 『忠霊塔図案集』の設計図案と蒙疆忠霊塔

塔（中略）の建設に対する助成並びにこれが維持祭祀⁽⁵²⁾のために日本国内で集めた数百万円の基金から支出されたものであったから募金について書く必要が無かったものとする。

なお蒙疆忠霊顕彰会はその後「蒙疆六カ所に戦跡記念碑」を建てると報じられている⁽⁵³⁾。

[張家口二十一日発同盟] 蒙疆忠霊顕彰会

では今回工費二十五万円をもって支那事変における東條、板垣両部隊奮戦の地八達嶺、張北長城線、大同、平原泉、厚和、包頭の六カ所に戦跡記念碑を建立することとなり近く着工する。

募金などの報は全くないので顕彰会が資金を出し、蒙疆忠霊顕彰会がその受け皿となってい

(52) 注(10)に同じ。

(53) 『朝日新聞』1943年9月22日。

たことを伝える報道であると言えよう。

蒙疆忠霊塔の建設は清水組が担当した。『蒙疆年鑑』は張家口などでの日本人建設業者の活躍を伝えるが、その一例が清水組であり優良鉄鉱石の産地である龍烟新鉱区柳家堡に通じる鉄道建設を担当した⁽⁵⁴⁾。清水組張家口出張所主任の吉田信忠は早稲田大学建築科を卒業して赴任し、忠霊塔を担当した1941年は34歳の気鋭の建築家であった⁽⁵⁵⁾。顕彰会『忠霊塔図案集』所収天野貫一的设计図案を参考に、手直しして設計し建設したものである(図7)。東京帝国大学建築学科出身の葛岡正男も1936年まで清水組技師として在職し、1941年には満州国営繕・建築局に所属してウランホト(王爺廟)のチンギスハーン廟を設計していた⁽⁵⁶⁾。この情報は清水組にも届いていたはずで、そうした環境下で意欲的に設計・建設されたのが蒙疆忠霊塔であったといえよう。

諸資料から丹念に蒙疆の日本人社会を描出・分析した小林元裕は、その論考の最後を次の文で結んでいる⁽⁵⁷⁾。

日本は「土の街」である蒙疆に文化をもたらす存在として同地に立ち現れたのであった。(中略)蒙疆の諸都市に近代建築を並べ、医療施設等を整備したのは事実であろう。しかし蒙疆では満州国と異なり計画的かつ大規模な都市建設がなされなかった。都市計画が全くなかったわけではないが、その実現は時間的、財政的に不可能であった。蒙疆は日中戦争の勃発によって生まれ、そしてその終了とともに地上から消滅したのであった。

当時張家口都市建設局には東京帝国大学建築科出身の大秋千秋、熊本高工出身の千葉隆秀、早稲田大学建築科出身の松下五郎らが在籍していた⁽⁵⁸⁾。張家口全体の都市計画は不詳であるが、東太平山の山麓を張家口の慰霊空間と位置づけて蒙疆神社や蒙疆忠霊塔を配置したと考える。

日本の植民地建築を論じた西澤泰彦は、「植民地支配の遺物として積極的に壊された建物は、各地の神社の本殿や忠霊塔といった限られた建物だけであった」と指摘する⁽⁵⁹⁾。

蒙疆における日本統治の象徴であった蒙疆神社と忠霊塔の終焉に触れておく。

張家口から日本人が引き揚げた前後の蒙疆神社と忠霊塔についての纏まった記録は見あたらないが、断片的な情報は残されている。

関西大学法律科出身で関東軍司令部蒙古研究員を経て蒙古聯合自治政府参議府秘書官、同総務庁参事官を歴任した中嶋万蔵は、1945年8月20日朝、蒙疆神社の見える丘に整列した駐蒙軍に同行してトラックで張家口を離れた。その時「旧市街の一角に火の手が上がっている。丘上には、当地で戦死された北白川宮永仁殿下を祭神として蒙疆神社も燃えている」と述べている⁽⁶⁰⁾。

また龍烟鉄鋼製鉄所の技術者として八路軍の誘いで残留し1945年9月末に張家口に入った田中康盛は「北白川宮記念碑、日本軍忠霊塔などを爆破、次いで蒙疆政府の、漢系、蒙系の高官を根こそぎ逮捕し、人民裁判を開いて処刑した」という話を残していると稲垣武は引用して紹介した⁽⁶¹⁾。

一方神社本庁調査課「海外引揚神職報告書」

(54) 前掲「蒙疆の日本人居留民」207頁。

(55) 布野修司編『アジア都市建築史』昭和堂、2003年、付表11頁。

(56) 包慕萍『モンゴルにおける都市建築史研究』東方書店、2005年、268頁。

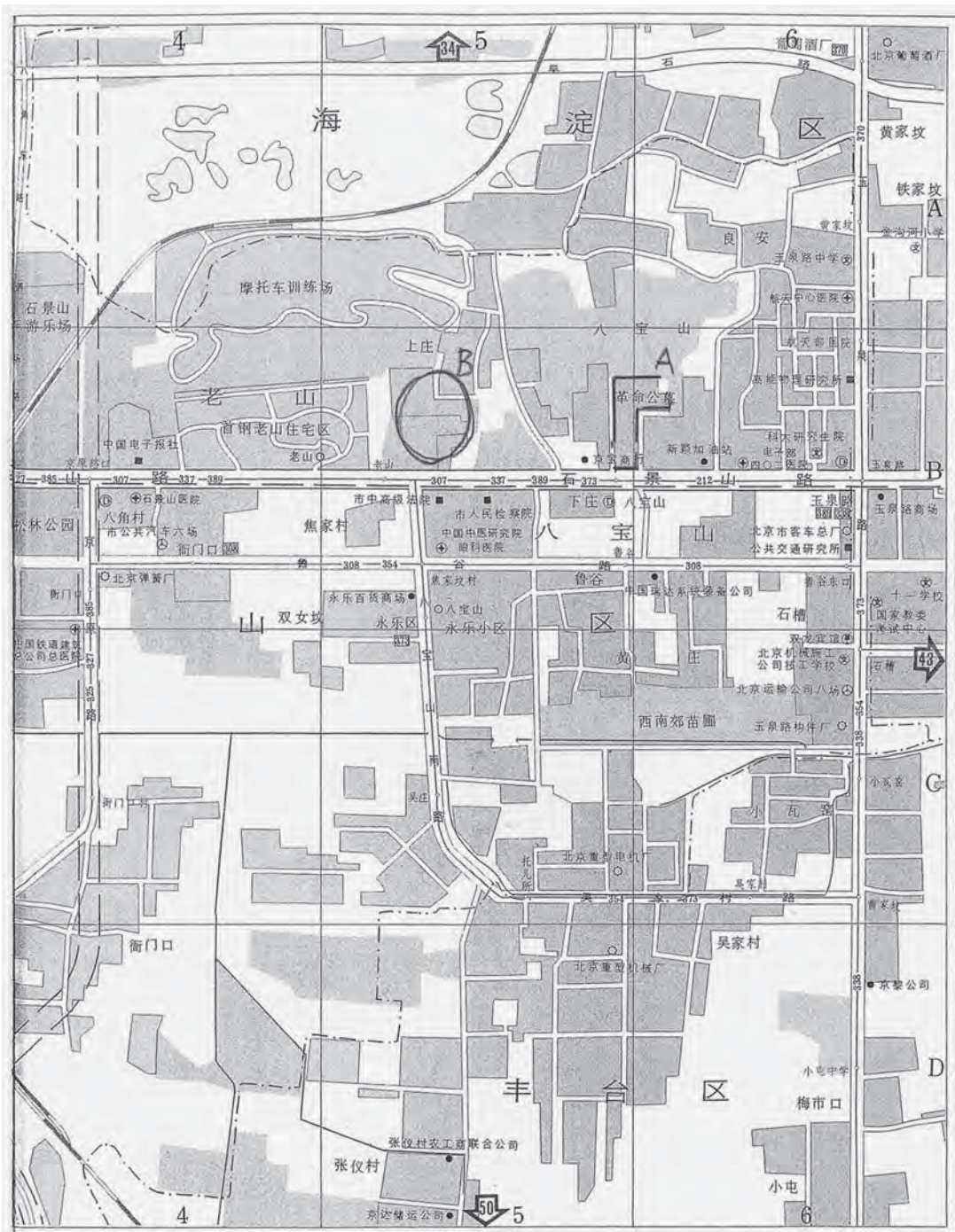
(57) 前掲「蒙疆の日本人居留民」228頁。

(58) 前掲『アジア都市建築史』付表7, 9, 10頁。

(59) 前掲『日本植民地建築論』408頁。

(60) 前掲『徳王とともに』94～95頁。

(61) 前掲『昭和20年8月20日 内蒙古・邦人四万人奇跡の脱出』224頁。



北京市燕山水泥厂

地址：石景山区南大荒

电话：8863131 8862043 邮政编码：100041

北京市客车总厂

地址：石景山区玉泉路南2号

电话：8230036 邮政编码：100039

京黎汽车装饰工业有限公司

地址：丰台区魏家村西209号

电话：8218229 邮政编码：100039

42

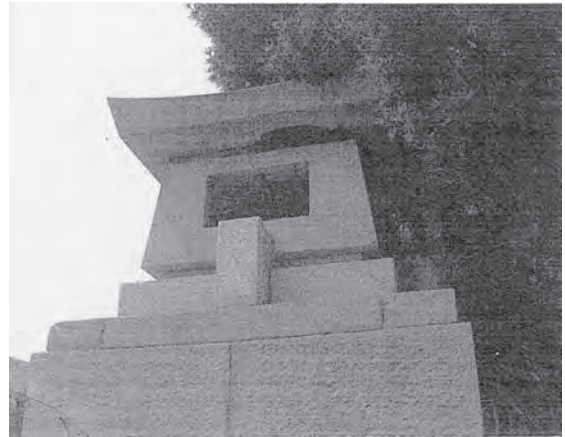
地図2 北京忠霊塔のあった位置（八宝山）

Aは八宝山革命公墓、Bは老山納骨堂（老山骨灰堂）

（王瑞平編輯『北京市実用地図冊』1994年、测绘出版社を縮小コピーしてA、Bを加筆）



老山納骨堂への階段を上った石畳



階段最上段の左右にある石製台灯籠



階段を上った石畳の納骨堂への道の入口にある係員の詰めている建物。「遺族以外の入場は禁止」と言われここから入れなかった

図8 老山納骨堂の入口の建物と階段上の台灯籠（2011年撮影）

（1946年）によって「終戦後の神社襲撃・略奪などの実態」を纏めた菅浩二によると、「蒙疆神社（張家口）などは終始平穩であったとされる」と記述している⁽⁶²⁾。

筆者はこれまでの調査から、一部は火事になり爆破されるなど破壊されたことはあっても、蒙疆神社も忠霊塔も建造物としては主要部分が残り改修されて戦後は別の目的に利用されてきたと考える。この点に関して、西澤泰彦の次の指摘⁽⁶³⁾は傾聴すべきであると考える。

植民地建築は、遺物であると同時に、遺物であるが故に市街地再開発における資産としての扱いを受けるに至ったのである。(中略) 植民地建築の遺産化、資産化こそが、植民地支配の実態を正確に後世に伝えることであり、植民地建築の存在は、絶えず日

本と日本人に植民地支配を風化させないための信号を送っているといえよう。

張家口の蒙疆神社と忠霊塔は、未だ遺産化・資産化されておらず原形を変えて利用されている。日本統治の象徴であったこれらの建築物こそ西澤が指摘するように、その歴史を明らかにし、継承していくことが必要であろう。

6. 続・北京の忠霊塔

前稿の「北京の忠霊塔」⁽⁶⁴⁾で、顕彰会は1942年10月刊の『忠霊塔物語』の中で、張家口に次いで近く北京の忠霊塔も着工すると記述していることを紹介した。一方北京市政協文史資料委員会編『北京文史資料』第52輯（1995年12月）には、1939年に着工したと読める関論文

(62) 菅浩二『日本統治下の海外神社』弘文堂、2004年、8頁表。

(63) 前掲『日本植民地建築論』410～411頁。

(64) 前稿113～118頁。

⁽⁶⁵⁾ があり、いつ着工したかは今後の課題とした。今回は着工に関する新たな文献を探すことはできなかった。また、関論文にあった忠霊塔を改造して老山納骨堂にしたのが張自忠であるとの記述は張治中ではないかと前稿で指摘した点は、今回張治中の自伝を読みこの推定はあり得ないことが判明した⁽⁶⁶⁾。従って誰が北京の忠霊塔の破壊を止めて改造を主張したかも課題として残った。

今回筆者は張家口に続いて、八宝山革命公墓と老山納骨堂を訪ねることができた。そして関論文に記述されていた通り「八宝山と老山の間にある山」に老山納骨堂（骨灰堂）が八宝山革命公墓から西へ約1kmの小高い丘陵に存在することを現認できた（地図2）。

その階段を上がった両脇には、石製の台灯籠が壊れかけて残っており、忠霊塔周辺の遺構の一部と思われる（図8）。階段を上がった納骨堂への道の入口に係員が詰めている建物があり、遺族以外は入場は禁止されているということだった。そのため忠霊塔を改造したという納骨堂を見ることはできなかった。入り口にいた係員の話によると、納骨堂には塔はなく以前塔があったということも聞いたことはないとのことであった。周辺に古くから住んでいるという人に通りがかりに尋ねたが、老山納骨堂に大きな塔があったというのは見たことも聞いたこともないとの回答であった。

関論文が指摘する忠霊塔の改造というのは、忠霊塔の基壇にあった納骨施設を利用したということで、塔そのものは壊されたのではないかと考える。

7. 続・上海の忠霊塔

前稿の「上海の忠霊塔」⁽⁶⁷⁾に於て、1937年8月から11月までの3ヶ月間に上海方面での日本軍の戦傷死者は4万人をこえたことを記した。この内訳について吉田裕は『戦史叢書支那事変陸軍作戦〈1〉』を引用して、戦死9,115人、負傷31,125人と内訳を記し、同時にこの間の中国軍の戦死者は25万人にも達したことを指摘している⁽⁶⁸⁾。上海事変後に激戦地であった大場鎮の忠霊塔以外にも、日本軍はその周辺に20余もの表忠塔などをたてた⁽⁶⁹⁾という。

そして日本が敗戦を迎えた時、上海の中国人が、中国軍の戦死者25万人への加害のシンボルとして日本軍が建設した記念碑を悉く打ち壊した⁽⁷⁰⁾というのも、重い歴史の事実として認識する必要があると考える。

前稿では現在の市街地図上の大場鎮の位置を示した。その後1940年に作成された「上海市区図」を入手したので、大場鎮の当時の地図上の位置を再掲する（地図3）。

政府の広報誌であった『写真週報』の「支那事変三周年」特集号⁽⁷¹⁾には、「あれから三年」と題された日中戦争開戦時の各地の写真と1940年7月頃の写真を対比した記事がある。

その中の大場鎮表忠塔の部分を取り出したのが図9である。遠景ではあるが表忠塔の形態は、前稿で上海市档案馆が「忠霊塔」として示した写真と極めて類似している。当時の日本政府が記念碑である表忠塔と、納骨施設の忠霊塔を混同するとは考えられないので、上海市档案馆が

(65) 関論文「日軍侵華期間在北平西郊建立的忠霊塔与靖国神社」

(66) 張治中『張治中回顧録』北京華文出版社、2007年261頁によると、重慶で国民政府の幹部をしていた張治中は、1945年9月13日新疆に派遣され、以後新疆の指導者として活躍しており、北京の忠霊塔の扱いに関して発言することはあり得ない。

(67) 前稿118～123頁。

(68) 吉田裕『天皇の軍隊と南京事件』青木書店、1985年、40～41頁。

(69) 前稿に引用した、上海市档案馆編『日軍占領期的上海』191頁。

(70) 同前191頁。

(71) 内閣情報部『写真週報』第123号、1940年7月3日。



地図3 上海忠霊塔のあった位置（大場鎮）

（蘇甲榮編製『新上海地図』1940年、日新輿地學社を拡大コピーし○を加筆）

忠霊塔として掲げた写真は、20余もあった表忠塔の一つを間違えて忠霊塔として掲載したのではないかと推定が正しければ、上海档案馆が忠霊塔として掲げた写真の解説に「1939年建設」とあるのは表忠塔の建設年であったのではないかとと思われる。

では、上海の大場鎮忠霊等の写真はないかと探していると、官庁や会社、工場などに”壁新聞”として貼りだされた日刊の『同盟写真特報⁽⁷²⁾』に掲載されていた。図9の表忠塔と似ているが、忠霊塔は下部の基壇の上に膨らんだ段が付いていて別の塔であることがわかる（図10）。アジ

(72) 同盟通信社『同盟写真特報』1942年7月15日号。

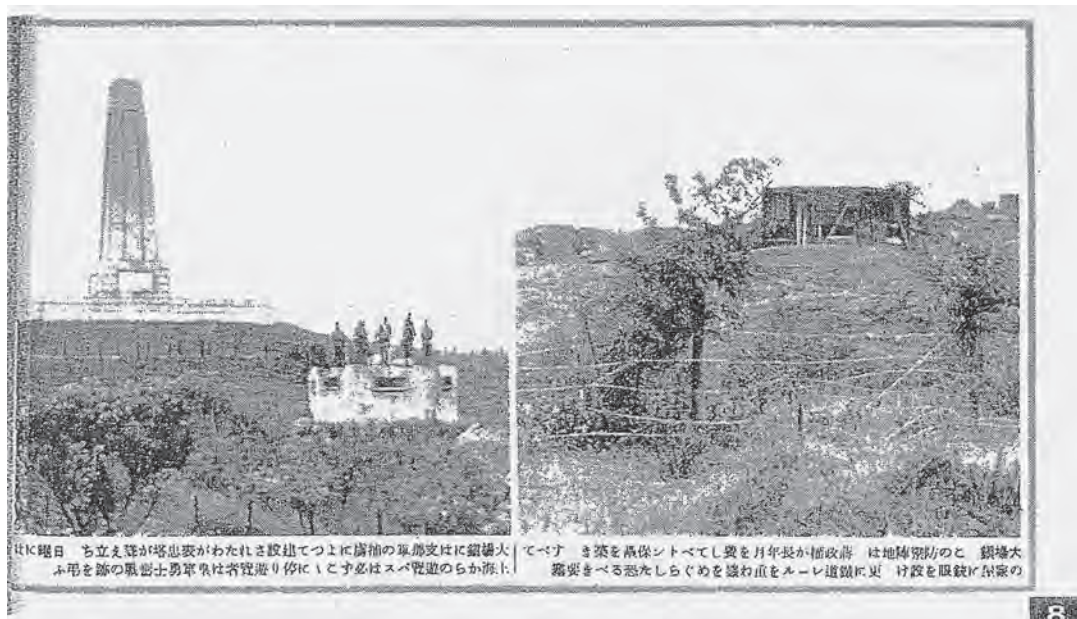


図9-A 大場鎮の「あれから三年」の写真（『写真週報』1940年7月3日）の表忠塔

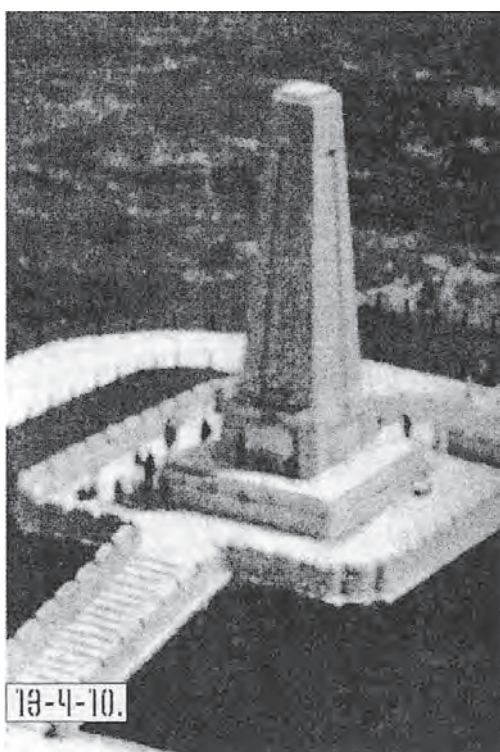


図9-B 上海市档案馆の写真集に掲載された「忠霊塔」写真（前稿118頁参照）

図9 大場鎮表忠塔の一つ

Aは20余あった表忠塔、記念塔などの一つの写真。Bの写真と見比べると塔に縦形の大きい窪みが同じようになり、その下基壇にも同様に正面に長方形の銘板らしい窪みが見られる、仰角と俯瞰の違いはあるが、同一の塔と考える。



図10 大場鎮忠霊塔前の道路を清掃する米兵捕(俘)虜
(同盟通信社『同盟写真特報』1942年7月15日号を縮小コピー)

ア太平洋戦争の開戦を機に、日本軍は上海租界を軍事占領し同地に配属されていた米海軍陸戦隊員を捕虜にした。その捕虜を大場鎮忠霊塔前の道路掃除に使役している写真である。従ってこの写真が撮影された1942年7月には、既に上海大場鎮忠霊塔は完成していたことが分かる。

さらに写真ではないが『少年倶楽部』の1941年7月号の口絵⁽⁷³⁾に、「事変がはじまつてからまる四年がたった。あのはげしかった上海戦のあとの大場鎮にはりつばな忠霊塔がたてられ参拝する人が絶へない」の説明がついて大場鎮忠霊塔の挿絵が付いていた。そこで竣工したのは1941年7月以前ということになる。

しかし1942年10月発行の『忠霊塔物語』には、北京が近く忠霊塔に着工し「上海もまたこ

れに次いで工事を起こすことになってゐる」⁽⁷⁴⁾と明記しているので、上海大場鎮忠霊塔の完成時期の記述の矛盾は課題として残る。

ところで図9の表忠塔の写真に添えられたキャプションは次の通りである。

大場鎮には支那軍の捕虜によって建設されたわが表忠塔が聳え立ち、日曜には上海からの遊覧バスは必ずここに停り遊覧者は皇軍勇士奮戦の跡を弔ふ

表忠塔を建設するにあたり、中国軍の捕虜を使ったというのである。また『写真週報』第132号⁽⁷⁵⁾には「表忠塔を築く勤労隊」のタイトルで、その写真とキャプションが見開き2頁に載っている。その一部を引用する。

三年前暴虐なる支那軍撃滅の戦火によつて

(73) 『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社、1941年7月号、巻頭カラーページ「忠霊塔」。

(74) 菱刈隆『忠霊塔物語』童話春秋社、1942年、206頁。

(75) 前掲『写真週報』第132号、1940年9月4日、20～21頁。



図11 上海居留日本人を動員した表忠塔づくり

(内閣情報部『写真週報』第132号、1940年9月4日、20～21頁。)

無惨に破壊された上海も復興も殆んどなり(中略)益々発展の途上にある上海をかへりみるにつけ、限りない感謝の念と共に居留民の心に魅つてくるのは、当時数十万の敵軍包囲下にあつて勇戦奮闘一命を捧げてよくわが居留民保護の大任を果たした上海陸戦隊将兵の忠烈無双な姿である。(中略)当時の激戦地の一つである上海広中路広場にこれら英霊を合わせ祀る表忠塔建立の計画が発表されたところ、上海全居留民は直ちに十数万円を拠出してこれを献納、一方勤労奉仕隊を組織して整地に連日献身的な奉仕を続けてゐる

表忠塔建設のために、上海居留日本人社会で拠金や勤労奉仕が組織されていたのである。記

事としては見当たらなかったが、上海では忠霊塔建設の場合にも同様の取りくみがあったのではなかろうか。

日本軍が中国に建設した忠霊塔でも上海と張家口の蒙疆忠霊塔では、居留日本人のかかわり方には大きな差があった。

8. むすび

日中全面戦争期に日本軍が攻め込んだ中国の占領地に、日本軍将兵の分骨納骨施設である忠霊塔をつくることは何のためであったかについては、前稿の「おわりに」でとりあげた⁽⁷⁶⁾。要約すれば戦没者の遺族のための追悼施設ではなく、中国に侵入した日本軍将兵に中国人が感

(76) 前稿 123～125頁。

謝の祈りを捧げるようになることを期待し、そのためのモニュメントであると顕彰会が位置づけていたことを指摘した。

今回とりあげた蒙疆忠霊塔着工式には遺族代表の参加がなく、大会戦地でもないのに張家口に建設されたのは、そういう位置づけで見ると理解できる。ただし上海大場鎮忠霊塔の場合は、日本人居留民を組織・動員する側面もあったということは注目される。

では中国で巨大な忠霊塔を建設する都市として、顕彰会はなぜ北京と上海と張家口を選定した⁽⁷⁷⁾のか。北京と上海は中国の代表的都市であり、日中全面戦争において近隣で大きな会戦があり戦没した日本軍将兵も少なくない。しかしその理由では、張家口が挙げられたことの説明がつかない。

顕彰会が『忠霊塔図案集』を発行したのは1940年3月であった。そこに北京、上海と並んで張家口を建設都市にするとある。ということは、この図案集の発行に先立って1939年には三都市に忠霊塔を建設する方針が、顕彰会で決定されていたということであろう。その当時の日本軍、日本政府と顕彰会の中国認識がそこには反映していたと考えられる。

日中全面戦争が二年目を迎えた1939年は、戦時体制づくりが急ピッチで進められていた。5月にノモンハンで関東軍と外モンゴル、ソ連軍間で大規模な武力衝突が発生したが、日本軍は大きな打撃を受けて停戦協定を結んだ。張家口を中心とした蒙疆地域の動向が改めて注目された。

一方1938年12月、日本軍が日中全面戦争の政治的解決の望みをかけた国民党長老の汪兆銘が重慶から脱出したが、同調する国民党員はほとんどなく中国軍に亀裂は入らなかった。1940

年3月に日本軍占領下の南京で汪を首班とする「国民政府」の成立を宣言したが、日本軍の傀儡政権でしかなく日中間の平和の道を遠ざけることになった⁽⁷⁸⁾。上海はこの汪政権下の重要都市であった。

1937年12月には「華北臨時政府」の成立が宣言された。北京に設立された同政府は華北の日本軍占領地域の支配を目指したが、重慶の国民政府に不満を持つ一部の軍人、政治家が参加した実態のない日本軍の傀儡政権であった。南京に汪政権が成立するとその傘下に入り、「華北政務委員会」に組織替えしたことは前稿で触れた⁽⁷⁹⁾。北京はその拠点であった。つまり1939年当時の日本軍の構想では、華中、華南では汪政権が組織した国民政府の「中華民国」、華北では「華北政務委員会」、そして蒙疆では張家口の蒙古聯合自治政府が地方政権として分立して日本軍に協力し、抗日を続ける重慶にある蒋介石の国民政府は「その他の一地方政権」と扱おうとした。その構想をうけて、顕彰会では北京と上海と張家口を同じ比重の都市として扱う考えが浮上したのではなかろうか。

蒙疆忠霊塔が竣工した時の日本の首相は、先述のチャハル作戦で関東軍を率いた東条英機であった。1942年に政府が発行した『写真週報』⁽⁸⁰⁾掲載の「大東亜戦争図」には、「満州国」、南京の「中華民国」と並んで「蒙古聯合自治政府」が書き込まれていた（地図4）。このことは張家口に忠霊塔がつくられた意味を示唆している。

前稿の「おわりに」後段⁽⁸¹⁾では、顕彰会が仏教の怨親平等の思想をひいて「支那兵の戦死者のために、立派な供養塔を我方の手によって建てる」と述べている文章⁽⁸²⁾を取り上げて検討した。そこでは怨親平等とはいっても、厳然

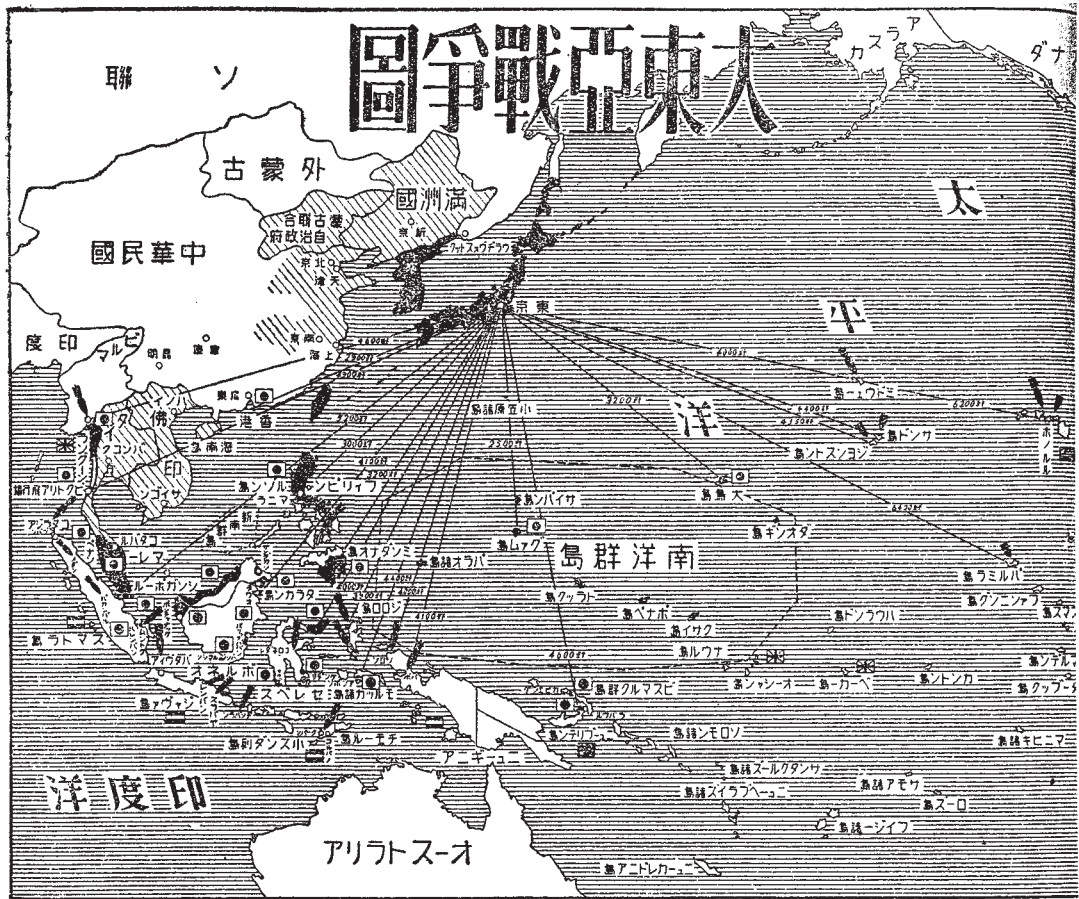
(77) 前掲『忠霊塔図案集』所収「大日本忠霊顕彰会の運動」。

(78) 前掲『日中全面戦争』277～279頁。

(79) 前稿114～115頁。

(80) 内閣情報局『写真週報』第209号、1942年2月5日。

(81) 前稿125～126頁。



地図4 「蒙古聯合自治政府」の書き込まれた「大東亜戦争図」
 (内閣情報局『写真週報』1942年2月5日(第209号)掲載図縮小コピー)

と敵と味方を峻別して優先順位をつけ、同じ戦争犠牲者として平等に扱うものではなかった点を指摘した。

なお顕彰会は「仁義を生命とする私共日本人は、むかしから敵を憐れむといふ、美しい心の深かったことは、国史の上にも、沢山の例が見られます」と古来の伝統的思想であったと述べていた⁽⁸³⁾。しかし怨親平等観は近世では断絶しており、一貫した伝統というより近代に入って欧米諸国の文明規範である「赤十字精神」と同様のものが日本にも昔からあったと主張する

ために「再発見」されて使われてきたという指摘⁽⁸⁴⁾もある。実際に日中全面戦争期に交戦相手であった中国軍将兵の慰霊碑、供養塔がどれだけ建設されたのかは明らかではない。ただし「日中戦争の当時は日本人は日本軍の戦死者と敵の中国軍の戦死者をともに『英霊』と呼んだ」、日本軍による「敵の慰霊」の記録は「少なくない」との指摘⁽⁸⁵⁾もあり、この解明も今後の課題の一つに加えておきたい。

交戦相手でなく、日本軍側について日中全面戦争に参戦し戦没したモンゴル人将兵について

(82) 前掲『忠霊塔物語』130～131頁。

(83) 同前。

(84) 藤田大誠「近代日本における『怨親平等』観の系

譜」『明治聖徳記念學會紀要』復刊第四十四号、錦正社、2007年、112～114頁。

(85) 同前117頁注(25)。

は、蒙疆の場合は「蒙古軍忠霊廟」の記事が残っている⁽⁸⁶⁾。

建軍以来蒙古軍肇建の尖兵として興亜建設の大業に殉じた蒙古軍日蒙系諸烈士の忠霊を合祀、永くこれを弔意顕彰すべく、昭和十五年厚和五塔寺内に蒙古軍忠霊廟を創建、毎年春秋二回盛大な慰霊祭を執行、蒙古軍の聖廟となつてゐる。

日本軍の補助軍として「独自軍事組織としての力量は日本軍に及ぶべくもなく、また強大な軍事組織に成長することを必ずしも日本軍が望んでいたわけではない」⁽⁸⁷⁾と評された蒙古軍は、日本軍の作戦に動員されて犠牲者も出していた。モンゴル人の部隊⁽⁸⁸⁾の犠牲者は、蒙疆忠霊塔ではなく蒙古軍忠霊廟に祀られた。蒙古聯合自治政府の施政綱領⁽⁸⁹⁾には「諸民族を大同協和し、人民の総意を旨とし、大いに経綸を行う」と諸民族の大同協和を謳った。しかし戦没者の慰霊の場は峻別された。⁽⁹⁰⁾ 交戦相手の敵どころか、味方のはずの蒙古軍に対してもこのような対応であったことを指摘しておきたい。

以上前稿と本稿でみてきた中国に建設された忠霊塔は、日本国内で仏教界や遺族の運動も巻き込んで建設された忠霊塔とはかなり性格を異にする。そのことを踏まえて顕彰会が国内で進めた忠霊塔建設運動と総合して、忠霊塔の歴史

的位置づけをしてゆく必要がある。ただしアジア太平洋戦争によって新たにシンガポールやその他の東南アジアの各地に建設され、計画された忠霊塔の検討は今後の課題である。

なお本稿は前稿と併せて論述したので、この場を借りて前稿の誤記（括弧内に正しい表記）を訂正したい。111 頁右 12 行目「1937 (1939)」、123 頁図 6 のキャプション「苜蓿隆 (菱刈隆)」、顕彰会会長名「菱刈隆 (菱刈隆)」に訂正をお願いしたい。

本稿作成にあたり北京首都図書館、大阪府立大学学術情報センター、大阪国際平和センターには文献調査でお世話になった。張家口での調査にあたっては、北川昌氏、安剣星氏、安俊杰氏、西原弘氏、安建生氏、謝輝氏、郝鉉氏、横山準氏に格別のご協力をいただいた。また、北京首都図書館での史料調査では横山いづみ氏と横山芳子氏に、老山納骨堂の現地調査では横山準氏の協力を得た。関連史料の日本語訳では坂井田夕起子氏、横山いづみ氏に補っていただいた。本稿作成中発表の機会を得た 15 年戦争研究会ではいくつかの貴重なご教示をいただき、山田裕美氏、奥田裕樹氏からは文献資料の提供も得た。記して謝意を表したい。

(86) 前掲『蒙疆年鑑』369 頁。

(87) 前掲「日本の蒙疆支配体制」62 頁。

(88) 前掲『日本陸軍と内蒙工作』176 頁。

(89) 前掲『徳王とともに』59 頁。

(90) 前掲『蒙疆年鑑』369 頁。